

Türkische Gewänder und osmanische Gesellschaft im achtzehnten Jahrhundert; les portraits des differens habillemens qui sont en usage a Constantinople et dans tout la Turquie.

Graz, Akademische Drucku. Verlagsanstalt, 1966. (文献番号 3 - 317)

18世紀トルコ人の衣服とオスマン社会；コンスタンチノープルとトルコ全土の習俗に見る様々な衣服の人物像

標題に示された通り、イスタンブールのドイツ考古学研究所所蔵の、18世紀に描かれた 208 枚の挿図からなる様々な服装をしたトルコ人の姿を色刷りで複製した豪華本である。この種の文献としては質量共に最も優れたものとなっている。図版の配列は 1 - 5 までが皇帝及び国家最高法律顧問官、 6 - 20 までは宮廷官僚とハーレムの居住者たち、 21 - 38 までは王宮の国務官僚、 39 - 69 までは王宮の外務官僚、 70 - 92 まではトルコ政府の高官と下級官吏、 93 - 125 までは陸軍と海軍、 126 - 160 までは聖職者と修道僧、 161 - 208 まではギルトと国民の順になっている。

序文の中でナウマン (Rudolf Naumann) は、「イスタンブールのトブカピ・サライ博物館に所蔵されていたオスマン・トルコ時代の多数の衣装と織物が調査され、18世紀後半に作製されたこの種の衣装写本があらゆる社会階層の人々を集大成して、これほどの豊富な内容を有しているのは、同時代の著作の中でも無類である。色彩や織物見本や衣装型式とならんで、そこに描写された諸物は、様々な意味で文化史的にも古いオスマン時代と近代の過渡期にあたる18世紀の社会を詳しく再現している。テンペラ画家は不詳であるが、用紙や描き方、題材などから1750



年から1790年の間の時期と見られる。図の下部には手書きの同一インクで、「カプス・ビヒェルシュタインの蔵書から」という簡単な書き込みがあり、元の所有者を教示している。第一次大戦後に同家の血縁者からドイツの古物商の手に入り、やがて1920年代初頭に設立された「トルコ文物愛好家協会」から1929年にはドイツ考古学研究所図書館の当時の館長の手に渡った」と記述されている。

図版は単なる服装画の水準から抜きんでている一方、この写本は文化史的にも芸術的にも価値の多い内容を有していたので複製が可能になった。

図は、冬の室内での姿で描かれたトルコ夫人。15世紀のエナンを思わせるとんがり帽。黒く毛皮で縁どったドレスと共布のローブ、腰に巻いたスカーフ。